

「シリコンバレーがやって来る」とJPモルガン・チェースのダイモンCEOが警句を発したの、2015年4月のことだ。当時、米国では、資金決済サービスや消費者向け貸出の分野で、シリコンバレーを発祥の地とするフィンテック企業が急拡大し、既存の金融機関と激しい競争を繰り広げていた。現在もその動きは続いている。

その後、我が国でも、フィンテックという言葉が連日のように新聞に掲載されるようになった。しかし、その実態は米国とは異なる。我が国では、伝統的金融機関とフィンテック企業が競争するというよりも、むしろ連携して顧客サービスを強化しようという動きが目立つのだ。例えば、家計簿アプリやクラウド会計ソフトとの連動をセールのポイントとして、インターネットバンキングの拡販を図る金融機関が増えている。フィンテックのサービスを經由する

と、従来は見えなかった顧客行動が見えてくる。それらを分析して貸出先のリスク管理や顧客への金融商品推奨に活用しようという試みである。

メガバンクや証券取引所が、資金決済や証券決済にブロックチェーン技術を適用する実証実験を進める際にも、設立間もない少数のフィンテック企業が重要な役割を果たしている。

フィンテックの発展は、今後、我が国の金融をどのように変えていくだろうか。

第1に、我が国の様々な金融サービスが相互に連携し、利用者の利便性が向上することが期

待できる。その際のキーワードは、オープン・イノベーションである。すなわち、金融機関が従来の自前主義を脱して、サードパーティによる自由なシステム開発とサービス提供を可能とし、新しい付加価値を生み出すことを指す。その実現のためには、銀行APIのオープン化が重要な鍵となる。

第2に、我が国の金融機関の情報システムが、インターネットを通じて外部と柔軟に接続可能なものに変化していくと考えられる。従来は、情報セキュリティ確保の観点から、外部のネットワークから隔離されている

ことが重視されていた。しかし今後は、むしろ発想を転換して、安全対策を強化したうえで、インターネットと親和性の高いシステムに積極的に移行すること、フィンテックのメリットを享受しようとする動きが強まるだろう。

第3に、我が国の金融機関における情報の活用にとさらなる進化をもたらす。フィンテックの導入とシステムのオープン化によつて、金融機関が取得できるデータは拡大する。それらを活用して高度な分析を行えば、金融機関のビジネスを根底から変革することが可能になるかもしれない。

これまで金融機関は、情報技術の進歩による果実を、主として安全性、安定性を追求する方向に利用してきた。しかし、フィンテックの動きは、その果実を別の方向にも活用することができることを示してくれた。フィンテックの発展が、我が国の金融機関のイノベーションを加速していくことを期待したい。

## フィンテックの発展と 金融機関の行方

日本銀行 決済機構局 FinTech センター長

岩下 直行



いわした・なおゆき ●1984年慶應義塾大学経済学部卒、日本銀行入行。94年に日銀金融研究所に異動し、以後約15年間、金融分野における情報セキュリティ技術の研究に従事。同研究所・情報技術研究センター長、下関支店長、11年7月から日立製作所情報・通信システム社に出向、13年7月決済機構局参事役、14年5月金融機構局審議役・金融高度化センター長、16年6月より現職。